

福井藩巢鴨下屋敷のリンゴをめぐって

柳沢 芙美子*

はじめに

1. 田中芳男によるセイヨウリンゴの接木
2. 江戸詰福井藩士の証言
3. 福井藩巢鴨下屋敷の変遷
4. 安政2年の「アッフル」－加賀藩士の江戸日記から
まとめにかえて

はじめに

ふだん私たちの食卓にのぼるリンゴは、幕末に日本へもたらされた欧州原産のセイヨウリンゴである。このセイヨウリンゴの渡来を確認できるもっとも早い事例として、福井藩巢鴨下屋敷に植えられたセイヨウリンゴをあげる説がある。たとえば、植物学者白井光太郎（1863－1932）¹⁾は、「西洋林檎漢名平果、文久年間巢鴨福井侯別荘に試植す、又明治四年開拓使の園へ米国種数十種を移植す」²⁾とした。また白井の『日本博物学年表』³⁾を継承して膨大な文献を博搜した磯野直秀は、北村四郎『本草の植物』を典拠として、「日本では文久年間（一八六一－六三）に江戸に米国のものが植えられた」としている⁴⁾。

さらにこの説に推測を加えて松平春嶽を「リンゴの父」とする説もある。たとえば、『新修福井市史』では、春嶽が「幕府の総裁職をしていた文久二年（一八六二）、アメリカからリンゴの苗木を取り寄せ、江戸の別邸に植えた。慶永はその後津軽地方（青森県）がリンゴ栽培に適していることを見抜き、津軽藩にリンゴの栽培をすすめ、苗木を贈った」⁵⁾とし、この説は小菅桂子『近代日本食文化年表』⁶⁾、梶浦一郎『日本果物史年表』⁷⁾等にも収載されている。

本稿は、こうした福井藩巢鴨下屋敷に植えられたセイヨウリンゴをめぐると言説について、資料的に裏付けられる範囲を整理しようとする覚書である。福井藩がこのセイヨウリンゴを導入した具体的な経緯を明らかにする資料は現在のところ見つかっていない。ここでは、農務官僚田中芳男の回想と明治期後半の元福井藩士の回想を主要な手がかりに、田中芳男研究、近年の本草学史等の成果にも学びながら、福井藩巢鴨下屋敷に植えられたセイヨウリンゴについて検討していきたい。

1. 田中芳男によるセイヨウリンゴの接木

小林健寿郎編『越前松平試農場史』⁸⁾では、福井藩巢鴨下屋敷のセイヨウリンゴについて『青森県りんご百年史』⁹⁾を引用して、1913年（大正2）5月の「田中芳男君七六展覧会」¹⁰⁾の際の講演録を

*福井県文書館主任

紹介した。博物学者であり農務官僚であったこの田中芳男の講演録は、セイヨウリンゴが文久年間に巢鴨下屋敷に植えられたという説の主要な典拠となっていると考えられる。半世紀近い年月が経過した時点での回想ではあるが、巢鴨下屋敷に植えられたセイヨウリンゴの存在を伝える重要な証言であるので、やや長文になるが関連部分を引用しておきたい。

(前略) 文久元年に至りまして、伊藤圭介翁が召されて江戸に出ました、私もそれに附いて初めて江戸に出ました、此年の四月に蕃書調所の頭取たる勝麟太郎、古賀謹一郎の二人から政府に向つて物産学といふものが世の中に必要であるから、是非其の巧者な人を採用して之を開く様にされたいといふことを建白されましたが、速かに採用されました、(中略)

また今言ふ平果であります、^{アップル}平果の樹があるからそれを接ひだら宜からうと云ふことで、其樹は巢鴨の越前家の邸にある、其邸は今の宮本小一君の邸であつた、そこに植ゑてあるから其樹枝を貰つて林檎若くは海棠を台木として接いだのが慶応二年の春であります、越前公はさういふことは分つた方であつたから、外国より取寄せられたに違ひない、夫ゆへ御本国にも^{アップル}平果の樹があつて実が成つたといふことであります、江戸にも越前にも両方に平果の樹があつたので私が見たのは、一間ばかりの樹でありまして凡二三十種あつたのを切つて接いだ、それが日本に^{アップル}平果樹を接いだ初めであります、明治になつて実が成りましたが、其樹は何処かに散乱して仕舞つた、此巢鴨の越前家の邸は私は深く存じませぬが、あすこは、羊を飼つた邸で綿羊屋敷と称へて居つた、ところが火事に遭つて綿羊が皆焼けて仕舞つた、其焼けた綿羊を埋めたからして、今でも掘れば羊の骨が出て来るといふことであります、其邸に平果樹が植ゑてあります、(中略)

慶応三年十月末に亜米利加から^{アップル}平果の各種を沢山送つてきました、其果実は見た所もよく味も良いので人々は驚きました、こんなものが世の中にあるのかと言つて珍しがつた、其時の^{アップル}平果の種類はいろいろありましたが其目録が残つて居らないのは遺憾に存ずることであります (後略)

「田中芳男君の経験談」(『田中芳男君七六展覧会記念誌』1923年)『東京国立博物館百年史』資料編、1973年。

ここでの田中の証言を、その経歴¹¹⁾や当時の開成所物産方の動きを補足しながら整理してみよう。

1857年(安政4)から名古屋の本草学者伊藤圭介のもとで学んでいた田中芳男は、この回想でも語られているように、古賀謹一郎・勝海舟の建白書に基づいて蕃書調所に物産学が設けられたのを機に、61年(文久1)伊藤圭介に随行して江戸へ出、翌年5月には蕃書調所物産学出役¹²⁾となった。この9月にはアメリカ公使から64品目のカリフラワー・レタスなどの農作物種子が献上¹³⁾されて、その目録編成と播種、62年12月には遣欧使節が持ち帰ったキンギョソウ・ヒエンソウなどの園芸植物¹⁴⁾・蔬菜等を翌年から播種、そして63年3月に伊藤が名古屋へ戻ったのちには、田中が物産方の中心となり、フランスの蔬菜や樹木(アカシヤを含む)の種子110種を播種、64年(元治1)には落花生・馬鈴薯・菊芋等の栽培、65年(慶応1)には亜麻やカミツレの試作を行ったといふ¹⁵⁾。

そして開成所(洋書調所をへて1863年改称)の物産学出役¹⁶⁾であった66年の春、福井藩巢鴨下屋敷にセイヨウリンゴが植えられていたというのである。田中はこの年初めから7月にかけて翌年のパリ万国博覧会に出品する標本作製のために、相模・伊豆・駿河・下総へ昆虫を中心にその他の物産上の標本を含む採集旅行へ出かけており¹⁷⁾、その合間に接木が試みられたことになる。

なお、直接にはわからないが福井藩との関わりでみれば、この時期開成所には教授として元福井藩士市川齋官¹⁸⁾がいた。市川は、50年(嘉永3)一代限りで福井藩蘭学方として召抱えられ、53年10

月天文方蛮書和解出役、蕃書調所開校直前の56年（安政3）12月に教授手伝出役、63年（文久3）12月開成所教授職、64年（元治1）には5月から12月まで海防・軍制調査のため帰藩したものの65年（慶応1）2月幕臣（直参目見以上）に召出されていた¹⁹。

田中の回想では、巢鴨下屋敷には180cmほどに育ったセイヨウリンゴが20～30種あり、これらから穂木を得てワリンゴあるいは海棠を台木として接木を行ったことがわかる。これらは、開成所物産方が増殖を試みるにたりる品種の明らかなものであったと思われる。ただ、そうであるならば、1862年のアメリカからの献上種子や遣欧使節の種子・球根類のように目録²⁰が作成されてもいいのだが、残念ながらそこまで来歴がはっきりしたものではなかったのか、目録等の記録は残存せず、「越前公はさういふことは分つた方であつたから、外国より取寄せられたに違ひない」という、あくまでも推測を語っているにすぎない²¹。

この福井藩巢鴨下屋敷に植えられていたセイヨウリンゴから接木をしたという田中の証言は、すでに1901年（明治34）の田中芳男編『新撰日本物産年表』に記されていた。田中はこの年表で、自らの「田中芳男履歴書」を典拠に1866年（慶応2）に「開成所ニ於テ田中芳男越前家別邸ニ植ル所ノ米国種苹果樹ノ枝ヲ得テ接木シ之ガ繁殖ヲ図ル、是我邦苹果栽植ヲ企ツル始ナリ」²²とした。さらにこの年表では、同じ「田中芳男履歴書」を典拠として、68年（明治1）には「苹果始テ結果ス（慶応二年参看）」とあり、接木した枝にリンゴが実ったとしている²³。

リンゴの接木に関わる田中の事績は、この物産年表が出版される以前からも知られていたようだ。1896年（明治29）刊行の楨忠一郎『新定農業書』²⁴では「其本邦ニ舶来シタルハ幕末ニ当リ東京巢鴨ノ旧福井藩主松平家ノ扣屋敷ニ米国ヨリ移植シタルヲ以テ初トス」と記され、山田勝伴『最新苹果栽培法』（1909年）²⁵や2で紹介する柘植六郎『実験果樹園芸新書』（1908年）など、後の農業技術書でも言及されていた。さらに『青森県りんご百年史』では、1896年（明治29）9月27日付けで田中自らが揮毫した「『アップル』ノ我邦へ伝ハルノ初ハ文久年間ニ在ルニ大ニ繁殖ヲ図リシハ開拓使及ヒ勸業寮ノ力ニヨル」²⁶とする書幅が紹介されている。

こうした点から少なくとも明治20年代の終わりには、この書幅のように接木を行った66年（慶応2）から数年遡る文久年間に渡来したという説を田中自身が記し、農業技術者の間で知られることになったと考えられる。

2. 江戸詰福井藩士の証言

それでは、福井藩巢鴨下屋敷のセイヨウリンゴについて、福井県下あるいは福井藩士の間ではどのように伝えられていたのだろうか。一般的に県下では、青森県内に松平春嶽の顕彰碑が建てられていたことが新聞や福井市広報で大きく報道²⁷された1969年（昭和44）までほとんど知られることはなかったのではないだろうか。

この顕彰碑は、南津軽郡浪岡町の平野清蔵²⁸によって建られたものであった。彼は、1962年に刊行された『明治前期りんご植栽拡大史』²⁹の調査で、祖父秀七（1850-1928）が1866年（慶応2）江戸から買ってきて植えたりんごが青森りんごの発祥になったと主張していた。しかし、勸業寮による試植苗の「栽植拡大の経過とそれを推進した先駆者の系譜と業績を記録」³⁰しようとする『明治前期

りんご植栽拡大史』の関心からは、「資料がなく推理も又不可能である。仮りに勸業寮苗木よりも早く導入したとして（その可能性は絶無でない）それを母樹として繁殖されたのではないから発祥説をとるには当たらない」と斥けられていた。『明治前期りんご植栽拡大史』によれば、平野秀七は「明治二〇年頃から埼玉県安行の有名な苗木商早船善之助と契約して安行苗の委託販売を始め、その後弘前の地苗生産がおとろえてから、サナシ³¹⁾と穂木を大量に買付けて早船に送って仕立させた」³²⁾とされ、明治20年頃には埼玉県の苗木商と親密な関係を持っていたことがわかる。

いっぽう、福井藩の藩政資料である松平文庫の中に、1909年（明治42）の段階で、巢鴨下屋敷に植えられていたセイヨウリンゴについて江戸藩邸に勤務していた元藩士に照会した記録が残されていた³³⁾。これは、松平家の家扶を務めた鈴木準道³⁴⁾が、かつて巢鴨邸に勤務していた岩屋政に問い合わせた際の覚書と手紙の写しである。直接には前年の12月に松平試農場の技師山田惟正³⁵⁾から柘植六郎『実験果樹園芸新書』³⁶⁾に掲載された田中芳男の接木の記事について照会を受けたことがきっかけとなっていた。参考までに『実験果樹園芸新書』の記述を引用した上で、鈴木の覚書を見ていきたい。

日本に苹果が輸入せられたるは、文久年間に福井藩主江戸巢鴨の別邸に移植せられたるを以て創始とす、その後慶応元年に田中芳男氏越前家より米国種苹果の枝を得て接木をなし繁殖を図られたり、之れ我国に於て苹果の繁殖栽培を企てたるの始めなり
柘植六郎『実験果樹園芸新書』1908年

明治四十一年十二月、松平試農場技師山田惟正氏準道へ照会スルニ此頃果樹園芸新書を覽するに、文久年間御屋敷巢鴨御下屋敷ニ於テ苹果苗木御買入ニ而植込ニ相成たる云々と申事あり、果して右様之事有之哉否之尋問ニ付

更ニ右様なる事承知不致、乍去準道安政六年三月初メ而江戸表相詰被申付、出府之後常盤橋邸ニ罷在候而□□番江戸見物為スニ中・下屋敷拜見ニ罷越□依而古詰之者ニ同行、夜巢鴨御下屋敷へ罷越御庭等拜見候節、未三・四疋御庭ニ遊びおり、所々拜見候内庭番之人これハ西洋林檎之木と申間候事ハ予之耳ニ留居も、実も無之聴流しニ致候、今御尋ニ付心付候へハ果して苹果なる事を思ひ出したりと、其節邸番ハ只今^(殿)蛸壳町地所指配勤務候岩屋政氏と覚居候ニ付、同人へ一応状況を尋候旨申直ニ岩屋氏へ照会試候処、果して西洋林檎有之たるニ相違無之、然レトモ植物等ニハ別ニ念頭無之ニ付、慶永公思召ニ而御取寄ニ相成タルヤ右等を承知不致、併其頃ハ植木屋入込夫々手当致候事ハ承知候ニ付公思召ニ而御取寄御植付哉ニ存候、云々申参候、尚岩屋書面是ニ認置候

岩屋政氏書面写

備々仰越候巢鴨邸林檎植付之件、委細之事承知不仕候得とも、慶応元丑ノ四月巢鴨御守拜命、該地へ転住致候処、則ち西洋林檎苗と申事ニ而苗木数百株植付有之たれとも誰一人倍養ニ心を委する者無之、云は、植放之姿ニて大なる苗は五尺位ニしてまた枝も振らず苗ニ依りて二三寸位なる木札へ洋字認、針金を以て棹ニ結付たる物も数々見認候、右品之内一株を拙宅舎園移植培養試候処其年十一月転役常邸へ移住、其後者世々変遷ニ連れ、定府之者福井表へ転住ニ相成候而跡ハ木下十之介担任致居、戊辰の年出府、同邸之様子を承りたる処、該邸宮本小一郎氏なる者へ売渡ニ相成たる事と承知致候、其際林檎苗ハ如何ニ相成たる哉承知不致候、亦苗木買上ニ相成し候事も右様之訳ニテ承知不致候、植付たる者ハ只今より三代先巢鴨邸門前ニ住居せし植木屋新左衛門なる者ニ有之候云々

二月廿五日

岩屋政

鈴木様

絵図ハ略之

「福井藩主并藩士記事」松平文庫、福井県立図書館保管

まず、『実験果樹園芸新書』の記述をみると、年代に誤記があるものの田中芳男の証言をほぼ正確に記述している。

一方、鈴木準道の覚書では、冒頭部分に鈴木自身の回想が記されている。これによれば、鈴木は初めて江戸に出た1859年（安政6）3月からまもない時期に巢鴨下屋敷を拝見した際には羊が3・4匹いて、いろいろ見せてもらったうちには確かに庭番からセイヨウリングがあることを聞いたが、実もなっておらず気にも留めなかったという。

鈴木が江戸にいた時期は、松平文庫の履歴資料と藩主松平茂昭の参勤交代等の日程からみるとおおよそ（1）59年3月から翌年3月まで、（2）61年（文久1）3月から62年5月、（3）63年8月から12月の3度³⁷⁾である。鈴木は初めて江戸に出た当時の記憶として、巢鴨下屋敷にセイヨウリングがあることを聞いていたと述べている。これが正しいならば、巢鴨下屋敷のセイヨウリングは、鈴木が江戸に出た59年、すなわち田中芳男が接木を行った年の7年以前から植えられていたことになり、66年（慶応2）に接木をした際に180cmほどであったという田中芳男の証言とは齟齬がでてくる。しかしながら、この時点から何度か栽培が試みられた可能性はなくはないので、鈴木の証言を完全に否定することはできない。

なお、春嶽との関わりについて鈴木は、そのころ植木屋を入れてそれぞれ手当てしていたことは（春嶽も）承知していたので、セイヨウリングは春嶽の考えで取寄せて植付けたのだらうと記している。このため、鈴木自身が付したこの覚書の目次表題は、「一、西洋林檎ハ春岳公へ文久度西洋ヨリ苗木御取寄ニ而巢鴨御下屋敷へ御植付第一ニ着手ノ事、外ニ当時巢鴨邸番岩屋政氏覚書添ノ事」とされている。

これに対して、巢鴨下屋敷にいたことのある岩屋の証言は、次のようなものであった。1865年（慶応1）4月に巢鴨下屋敷へ着任した時には、セイヨウリングの苗木数百株が植付けられていたが、栽培を担当する者もなく、いわば放置されたような状態であった。大きなもので150cm、振れるほどの枝もなく、6～9cmの木札に洋字が認められて針金で棹に結付けられているものもあり、また自宅の舎園に移植しても差し支えないような管理状態であったという。

岩屋政は明治維新後も長く松平家に勤務³⁸⁾していた人物であり、40年以上が経過した明治末年の回想ではあるが、苗木の大きさや品種を示すアルファベットの木札が付けられていたという点で田中芳男の経験談とよく符合する。さらに、その巢鴨邸の数百本の苗木は、ほとんど放置されたような状態で、苗木の購入先についてはわからないとしながらも、植付けたのは同邸の門前にいた3代前の植木屋「新左衛門」であるとした点で、他にはなかった具体的な内容をもっている。

なお、岩屋政の手紙の写しは、鈴木の手によるものである。文字的には「新左衛門」と読めるが、鈴木「新」と「所」は酷似しており、あるいは「所左衛門」の可能性もある。

巢鴨町に居住する町人については、1861年（文久1）11月に板橋宿に泊まり切れなかった和宮降嫁の行列³⁹⁾を受け入れるために急遽作成された「巢鴨町軒別絵図」⁴⁰⁾が残されている。この絵図を発

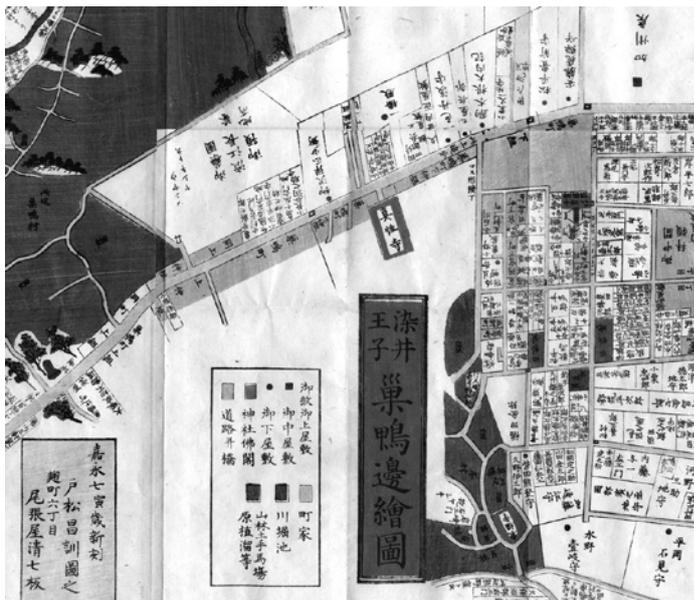


図1 「染井王子巢鴨辺絵」1854年
松平文庫、福井県立図書館保管

見・分析した高尾善希の論文⁴¹⁾ および豊島区立郷土資料館編『あ・ら・すがも－中山道と巢鴨地域－2007年度企画展図録』⁴²⁾ から、中山道沿いの巢鴨町の人名・職業等がわかるが、「新左衛門」および「所左衛門」はみあたらない。なお、この軒別絵図は、和宮行列の受け入れという作成意図を反映して、記載が街道筋の表長屋に限られている可能性が高いとの指摘がある⁴³⁾。

3. 福井藩巢鴨下屋敷の変遷

それでは、幕末福井藩の巢鴨下屋敷はどこにあったのだろう。その変遷を概観

しておこう。

藩主の居所となった福井藩上屋敷は、1713年（正徳3）以降常盤橋⁴⁴⁾にあった。巢鴨については、かつて1726年（享保11）から98年（寛政10）まで水野隼人正下屋敷上り地のうち6,399坪⁴⁵⁾を、これとは別に1752年（宝暦2）から66年（明和3）まで御徒三組上ヶ地6,628坪⁴⁶⁾を拝領した時期があったが、ここで問題としているのは1857年（安政4）9月に下賜された屋敷地⁴⁷⁾である。この際には神田橋中屋敷5,714坪の代地として渋江元亮預地であった巢鴨御薬園（図1左上）の内1万2,000坪（翌年4月添地、同薬園2,000坪）が下され、同年11月引き渡された⁴⁸⁾。この巢鴨薬園は、幕府の奥詰医師であった渋江長伯（1760－1830）が薬草栽培を行い、1817年（文化14）から綿羊を飼育⁴⁹⁾したため「綿羊屋敷」と呼ばれており、この巢鴨屋敷の拝領によって福井藩は、それまで下屋敷であった中之郷屋敷を中屋敷に、巢鴨屋敷を下屋敷とした。

添地2,000坪の下げ渡しは、福井藩の願書⁵⁰⁾に応じたものであった。この願書では、屋敷前の往来道の幅が狭く折れ曲がっているのが木材の運搬等に支障があること、残された元薬園の茶園が出張っているのに加え、裏手の方が谷になっているので家屋の建設にも差支えがあるとして残り部分の下付を願い出ている。ここからは往来道が未整備で起伏に富んだ屋敷地のようすが伝わってくる。

家屋がなかったため、福井藩は60年（万延1）8月26日から普請に取懸り、9月7日に完成し、検分が行われた⁵¹⁾。わずか10日あまりで出来あがったことになり、仮設的な家屋だったのだろう。松平文庫に絵図が残されている（図2）。

巢鴨下屋敷の明治維新前後の状況は、田中正弘の論文で知ることができる⁵²⁾。田中によれば、巢鴨下屋敷は、建物・草木等を含めて1868年（慶応4）閏4月に幕臣宮本久平・小一に1,200両（実際に支払われたのは825両）で譲渡・売却されたという。宮本小一は、57年（安政4）軍艦操練所調方出役、60年（万延1）から68年（慶応4）まで神奈川奉行支配調役並出役から同組頭勤方⁵³⁾にあり、病氣療養をへて新政府に出仕し、樺太境界交渉や日朝修好条規の締結等に関わった明治初期の外交官で

ある。この時期、大政奉還をへて旧幕府が崩壊する過程を目の当たりにした宮本は、おりしも健康を害しており、巢鴨下屋敷を譲りうけて帰農することを決意していたという。

田中正弘は、巢鴨下屋敷の譲渡にあたって、屋敷守徳山由左衛門から宮本父子にあてて出された証文に「貴殿儀当御家ニ御由緒も有之、旧来御出入相勤候旧功を以、永代御預ケ被成」と記されていることから「同藩への便宜供与の実績と先年より懇意な関係が背景に存在」⁵⁴⁾していたとしている。宮本と福井藩との具

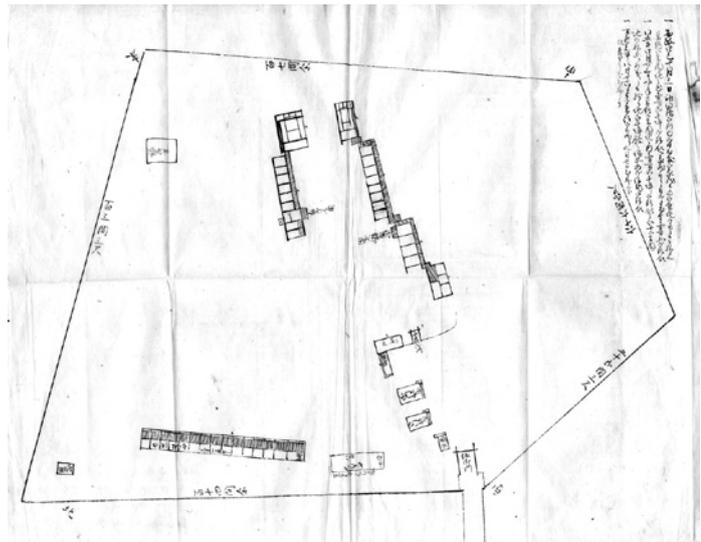


図2 福井藩の巢鴨下屋敷

松平文庫、福井県立図書館保管

体的な関係は今のところ不明である。福井藩は1858年（安政5）6月から翌年10月まで神奈川横浜辺警衛を命じられ⁵⁵⁾、59年5月末に横浜が開港されるやいなや翌月には「国元産物」を販売する商館を開業、翌60年（万延1）3月には江戸藩邸から横浜村に隣接する太田陣屋に出張していた制産方下代岡倉覚右衛門⁵⁶⁾を「横浜商館手代勤」としていた⁵⁷⁾。

さて、その後巢鴨下屋敷は、1870年（明治3）になって太政官布告に基づき福井藩から東京府に上地⁵⁸⁾されたため、825両は福井藩と福井県によって宮本父子に返却された。このため宮本は、東京府に対して払い下げを願い出て、屋敷とそこに繁茂していた「小杉立木四千八百本」を買い取り「長華園」と命名して農園として整備していった。地券交付時の旧巢鴨下屋敷の地番は、「巢鴨三丁目二十六番地」であった。

興味深いのは、宮本が南に隣接した元旗本西沢家屋敷地を買い取り拡張する際に、「花戸」（植木屋）である「巢鴨三丁目大川所左衛門」の名義を借りた⁵⁹⁾としている点である。大川所左衛門は、平野恵『十九世紀日本の園芸文化』によれば、1876年（明治9）刊行の『東花植木師高名鏡』に「地木鉢物師」⁶⁰⁾として名を連ね、また翌年には巢鴨真性寺の世話人惣代を務める位置にあった人物であった⁶¹⁾。宮本父子への巢鴨下屋敷の譲渡は、何らかの「旧来御出入相勤候旧功」に基づいて行われたと考えられるが、同様にこの植木屋大川所左衛門⁶²⁾も巢鴨下屋敷とそれ以前から何らかの関わりがあったのかもしれない。

4. 安政2年の「アップル」ー加賀藩士の江戸日記から

ここまで1866年（慶応2）に福井藩巢鴨下屋敷にセイヨウリングが植えられていたとする説を、可能な限り典拠の明らかな資料を照合して裏付けてきた。しかしながら、典拠とした資料はいずれも後世での回想であり、巢鴨下屋敷のセイヨウリングの存在をより確実に論証できる同時代の記録ではない。これに対して加賀藩士の記録で、これより11年以前にセイヨウリングと思われる果実を栽培し、ジャムにして食したという日記がある。

1854年（安政1）春にアメリカからもたらされた「アップル」が加賀藩江戸屋敷で栽培され、翌年秋に実ったとする加賀藩士の日記「御参勤御供中日記」⁶³である。この日記についてはすでに長谷川孝徳が新聞で紹介⁶⁴し、2009年（平成21）3月21日発行の『広報いたばし』⁶⁵でも紹介されている。藩主前田斉泰の近習であった加賀藩士小川仙之助⁶⁶（1828-1909）が、参勤交代に随って江戸に出た1855年（安政2）3月26日から翌56年3月28日までの日記を中心とする記録である。この55年11月24日の条に以下のような記述がある。

十一月廿四日天気好霜強 今朝三鐘頃
地しん有之
一去春亜墨利加渡来之アップル、木作足軽へ御渡植付被仰付候所出来仕候ニ付、上之申候所御奥ニ而〇程之餅之上へアップルをぬり被食候様ニ被仰付候旨ニ而御側廻りへ頂戴被仰付候

〔御参勤御供中日記〕加賀藩士小川家文書、石川県立歴史博物館蔵

「アップル」を栽培した「木作足軽」は、後述するようにこの日記から果樹・薬草・園芸植物などの栽培に専門的に従事していたことがわかる⁶⁷。文化期に幕府の「柳営秘鑑」にならって編纂された加賀藩の「国格類聚」（北藩秘鑑）をみると、藩主が江戸にいる際の江戸詰総数は上屋敷だけでも2,103人と膨大な数にのぼった。このためか、「国格類聚」では上屋敷の足軽以下の総数やその内訳については触れられていない。これに対して下屋敷（平尾邸）には、定府定番足軽27人、「木作兼帯」の「書留」5人、「御境廻番人足軽」3人、普請作事を専門とする「手木足軽」9人おり、定府御畑作小物2人が詰めていたとされる⁶⁸。このうち木作を兼帯する「書留」が木作足軽にあたるとされる。同様な職務を担う足軽は、広大な庭園（「育徳園」）を持つ上屋敷にも配置されていたとみるべきかもしれない。こうした木作足軽に、1854年（安政1）春にアメリカから渡来した「アップル」を植付けさせたものが翌年秋に実り、藩主前田斉泰が奥向きへ小さな餅に塗って食べるようにいわれたので、近習たちも頂戴したというのだ。

この「御参勤御供中日記」は、小川の私的な業務記録であり、残存するのは江戸に滞在した前述の1年間のみである。この間、「亜墨利加出来之たたみ梯子」⁶⁹の拝見（4月2日）、薩摩藩が幕府に献上することになる軍艦昇平丸（帆船）の視察⁷⁰（5月8日）、オットセイの「丸塩」（剥製か）の拝見（2月9日）、講武所砲術教授方下曾根信敦による駒場野調練の見物（3月8日）など、江戸で見聞した珍しい事物が書き留められている。その中には、奥向きから側近たちに贈られた西瓜（7月1日）、むべ（9月28日）、蜜柑（12月4日）などが記され、同様に次のような園芸植物に関する記述も散見される。すなわち、昨年花が咲き当年実を結んだ「吉祥草」を木作足軽が献上（12月17日）、正室溶姫⁷¹から送られた桜若木3本を木作足軽に当秋本国へ持ち帰るように達（3月4日）、奥向きから贈られた「唐菜」を木作足軽へ渡し栽培を達（3月9日）、「積雪草」「白舞桜」「紫桜」「薄墨桜」「実生桃」「一歳桃」⁷²「龍眼肉」等ができたので当秋木作足軽が交代する際に育成するように達（3月18日）などである。奥向きや溶姫を通して珍しい園芸植物が持ち込まれ、木作足軽の転勤時に本国の加賀へも伝播していたことがわかる。

前年春にアメリカから渡来したとされるこの「アップル」が、セイヨウリンゴであった可能性はある。しかしながら、1854年（安政1）の日米和親条約締結の際に、アメリカ大統領フィルモアからの献上品として、蒸気機関車（模型）・電信機等とともに贈られた「種物 三箱」⁷³には、アザミヤグ

ルマ・オクラ・ヨルガオ⁷⁴⁾などの種子が入っていたとされ、この時点でのセイヨウリンゴの渡来は今のところ確認できない。

まとめにかえて

以上、1・2の田中芳男および福井藩士の回想によれば、1866年（慶応2）福井藩巢鴨下屋敷には開成所の物産方が増殖を試みるにたりる20～30種のセイヨウリンゴが植えられていたと考えられる。そして、ここでの福井藩士の証言と3で取り上げた明治初年の巢鴨下屋敷譲渡の顛末からは、下屋敷の植栽を管理していた巢鴨の植木屋「新左衛門」あるいは「大川所左衛門」との関わりが浮かび上がった。これとは別に4では、これより11年以前、1855年（安政2）にセイヨウリンゴと思われる果実を栽培し、ジャムにして食したという加賀藩士の日記を紹介した。ここでは、加賀藩の場合ではあるが、果樹・薬草・園芸植物などの栽培に専門的に従事する「木作足軽」がおり、木作足軽によって増殖されたこれらの植物が、参勤交代時に本国の加賀へも伝播したことを明らかにした。

この加賀藩の「アップル」も、福井藩巢鴨下屋敷のセイヨウリンゴも、具体的な輸入と伝来の経緯が明らかにならない限り、ひとつの興味深いエピソードに止まらざるをえない。とりわけ後者の段階では、59年に横浜・長崎・箱館が開港してから7年近くが経過し、海外から動植物が陸続と流入していたはずだ。セイヨウリンゴが巢鴨下屋敷から民間へ流出したのではなく、逆に民間で輸入されたものを福井藩が入手した可能性も含めて、福井藩がどのような経路で、また人的ネットワークで品種が明らか数十種のセイヨウリンゴを導入したのかが明らかにされなければならないだろう。

近年、本川幹男はこれまで実証的に明らかにされていなかった幕末福井藩の殖産興業策、とりわけ産物会所の成立からその組織と活動、横浜・長崎・下関等での他国交易の広がりとその実態を解明した論文を相次いで発表してきた⁷⁵⁾。これによれば、福井藩では、1857年（安政4）の初めから外国貿易を見据えた紙・生糸・紬などの国産品の研究・販売を模索する動きがあり、60年（万延1）末には長谷部甚平・三岡石五郎（のちの由利公正）ら「制産方」が中心となって国産品の生産・流通・販売の拠点となる「産物会所」が設置され、横浜・長崎・下関等へ交易地が拡大されていった。さらにこうした動きは、63年（文久3）7月、挙藩上洛計画が挫折した際にいったん縮小するものの、制産方では人参、豚・綿羊・山羊・牛・鶏などの畜産、山蚕、銅などの生産が取り組まれていたことがわかる。セイヨウリンゴの導入のエピソードは、こうした幕末福井藩の産物開発・交易活動の動きのなかに位置づけて検討される必要があるだろう。

また、セイヨウリンゴのエピソードに関連して吉田健は、横浜の商人から福井藩士にあてた次のような手紙を紹介している⁷⁶⁾。1863年（文久3）11月に出了ると考えられるこの手紙には、「弁隣」からもらったアメリカ産の珍しい大きな「棗」を2個送るので、そのうちひとつは京都（春嶽の元）へ送ってほしい、芽が出るかも知れないのでその種を蒔いてほしいとあったという。この手紙の主は横浜の「越州や金右衛門」すなわち前述した「横浜商館手代勤」岡倉覚右衛門であり、たびたび横浜から福井藩へ様々な情報を書き送っていた。そして、「弁隣」と記されているこの「棗」の入手先は岡倉の情報源である「ウェンリート」すなわちヴァン・リード（1835-1873）と考えられる。ヴァン・リードは、開港後最初に入港したハード商会商船ワンダラー号で横浜に到着し、ハード商会の契

約社員、神奈川アメリカ領事館書記、ハワイ総領事等として活躍し、「横浜新報もしほ草」の発行人ともなる人物である⁷⁷⁾。こうした横浜・長崎等の開港地との他国交易とその具体的な人的ネットワークの広がりの中かでセイウリングの導入を跡付けることも今後の課題である。

注

- 1) 白井光太郎は、1886年（明治19）東京大学理科大学を卒業後、ドイツへ留学、1906年東京帝国大学教授となり、日本の植物病理学の発展に大きく貢献した。白井は、福井藩士白井幾太郎（久人）の長男として1863年（文久3）福井藩の霊岸島下屋敷に生まれた。父は1858年（安政5）8月以降、松平慶永（春嶽）附小姓となり72年（明治5）まで慶永附近習頭取、内務局頭取、執事等を務め、慶永の側近にあった（「士族」松平文庫、福井県立図書館保管）。光太郎は1864年にいったん福井へ帰った後、再び71年に上京し、10歳から13歳頃には父に従い、浅草橋場町別邸にいた松平慶永の側近で奉仕したという（山田昌雄「白井光太郎と福井県出身の植物病理学者達」福井県郷土誌懇談会『若越郷土研究』53-1、2008年）。
- 2) 白井光太郎『植物渡来考』岡書院、1929年、p.171。
- 3) 白井光太郎『日本博物学年表』増補改訂版、大岡山書店、1934年。なお、この年表では田中芳男の種々の著書や事績にふれているものの、セイヨウリングには触れられていない。
- 4) 磯野直秀「明治前園芸植物渡来年表」『慶應義塾大学日吉紀要・自然科学』（42）2007年。磯野の典拠は、北村四郎『本草の植物』（保育社、1985年）である。北村によれば、セイヨウリングに比べて果実が小さく、果枝のより長い中国原産の林檎（リンキン、ワリング）は「平安末期には日本へ伝来して、江戸末期までのリング」であり、これに対してセイヨウリングは「日本では文久年間（一八六一―六三）に江戸に米国のものが植えられた」とされている。この記述の典拠は示されていない（『北村四郎選集』2、p.62）。
- 5) 『新修福井市史』1、1970年、p.114。福井新聞のWebサイト「福井トリビア」でも、この説をほぼそのままに取り入れ「リングの父・春嶽」と題して次のように掲載している。「名君とうたわれる第16代福井藩主・松平春嶽。産業振興についても、福井城内に試農場をつくり、果樹栽培に取り組むなど力を入れた。新修福井市史によると、幕府政事総裁職時代に米国から取り寄せたリング苗木を江戸別邸に植樹。その後、津軽地方の栽培適性を見抜き津軽藩に苗木を贈呈。それからリングは青森県一帯に植えられ、名産となったといわれる。」<http://www.fukushima.co.jp/modules/toribia/index.php?page=article&storyid=5>（参照2010-01-23）
一方、青森県北津軽郡板柳町「ヴァーチャルリング博物館」Webサイトでは、「慶応2年（1866）徳川幕府所（蕃書）調所の田中芳男、越前松平春嶽公の江戸巢鴨邸のりんごの穂木をとり接木、わが国初の西洋りんご（アップル）の接木とされる」とされ、田中芳男の当時の所属について誤りがあるものより推測の少ない表現になっている。<http://www.town.itayanagi.aomori.jp/vrh/default.asp?ThisMenuID=009>（参照2010-01-08）
- 6) 小菅桂子『近代日本食文化年表』雄山閣出版、1997年、p.5。
- 7) 梶浦一郎『日本果物史年表』養賢堂、2008年、p.87。
- 8) 小林健寿郎編『越前松平試農場史』越前松平家、1993年、p.3-4。
- 9) 波多江久吉・斎藤康司編『青森県りんご百年史』青森県りんご百年記念事業会、1977年
- 10) この展覧会は、翌年に喜寿を迎える田中芳男のために友人・後輩たちが企画したもので、田中の希望で祝賀会ではなく、自身の作製物や収集品を展示したという（田中義信『田中芳男十話・経歴談』改訂版、田中芳男を知る会、2008年）。
- 11) 田中義信「田中芳男年譜」前掲『田中芳男十話・経歴談』。また1868年（明治1）から1889年までの履歴は、1915-24年「贈内申書」（国立公文書館蔵）の「田中芳男（東京府）」に詳しい。
- 12) 「物産学出役田中芳男明細短冊」多聞櫓文書、国立公文書館蔵。
- 13) 前掲磯野直秀「明治前園芸植物渡来年表」。
- 14) 同上。
- 15) 田中芳男『新撰日本物産年表』十文字商会、1901年、p.100-101。
- 16) 「開成所人名録」慶応二年丙寅六月十五日改、文部省『日本教育史資料』7、1892年。
- 17) 「田中芳男君の経験談」『東京国立博物館百年史』資料編、1973年、p.566-567。
- 18) 松平慶永時代の給帳には、「拾人扶持（外失却金貳拾五兩年々）蘭学方 定江戸市川斎宮」とある（『福井県史』資料編3、1982年、p.150）。
- 19) 「剥札」（松平文庫、福井県立図書館保管）、「蕃書調所起源考略」（文部省『日本教育史資料』7、1892年）および宮崎ふみ子「蕃書調所＝開成所に於ける陪審使用問題」（『東京大学史紀要』2、1979年）。
- 20) 田中芳男訳「米国舶来種子目録」、同「仏国種球根目録」「仏国種子目録」「仏国種物目録」（田中義信「田中芳男著作等目録」『田中芳男十話・経歴談』改訂版、p.53）。
- 21) 前掲『青森県りんご百年史』では、「田中のこの記憶が正確であるとすれば、越前藩主松平慶永は慶応二年をさ

かのぼること少なくとも一、二年の頃、二、三十種類のりんご苗を輸入して、これを本国の福井と江戸巢鴨に植えたことになる。従って慶応二年春に田中が接木したという苗木はその頃巢鴨に集中していた植木屋に流れて、これが一般民間に渡ったことも容易に推測できることである」とし、推測を重ねて春嶽が輸入したセイヨウリンゴの苗が民間に流出したとしている。

- 22) 前掲田中芳男『新撰日本物産年表』p.101。なお2003年に飯田市美術博物館へ寄贈された「田中芳男履歴年表」には、「慶応二」「始テ平果ヲ接樹シ、繁殖ヲ図ル」という簡略な記述のみがあり、福井藩とのかかわりには触れられていない（田中義信「田中芳男履歴年表」『飯田市美術博物館研究紀要』14、2004年）。
- 23) 前掲『青森県りんご百年史』では、田中芳男が『中外新聞』（1868年4月27日）に書いた「苹果も方今は許多の菓を結ぶに至れり。此物世間に流布するに至らば、又一種の物産を増補すると言ふべし」とする記述を、1868年「四月の時点で『許多の菓を結ぶに至れり』としているのは前年の事実をさしているものでなければ正確とはいえない」として、「この時点で結実したりんごというのは松平邸のりんごしか考えられない」としている（p.4）
- 24) 榎忠一郎『新定農業書』下巻、有隣堂、1896年、p.86。榎忠一郎は、農学士で出版時は新潟県尋常師範学校教諭。長野県・新潟県尋常師範学校教諭を歴任した。
- 25) 山田勝伴『最新苹果栽培法』朝田商会（札幌）、1909年、p.1。ここでは「本邦にては福井藩士が、文久年間江戸巢鴨の別邸に栽植せるを嚆矢とす、慶応元年開成所に於て、之を海棠又林檎砧に接木し繁殖を図れり」とされている。
- 26) 前掲『青森県りんご百年史』、p.4 - 5。
- 27) 『毎日新聞』福井版（1969年6月4日）では、「やっぱり津軽に 松平春嶽公『リンゴの父』の像わかる」との見出しで、「像があるのは青森県南津軽郡浪岡町の平野リンゴ園（平野清蔵さん経営）。平野さん方に残っている記録によると、春嶽公が幕府の総裁職をしていた文久二年（一八六二年）アメリカからリンゴの苗木を取寄せ江戸の別邸に植えた。わが国にリンゴ園（マヽ）がはいったのは、これより前の安政元年（一八五四年）日米和親条約記念として徳川幕府におくられたのがはじめてだが、本格的に栽培を手がけたのは春嶽公だった。春嶽公はその後、青森県の津軽地方がリンゴの栽培に適していることを見抜き、津軽藩にリンゴ栽培をすすめ苗木を贈った。その時に平野さんの祖父秀七さんが同地方ではじめてリンゴの栽培をはじめた。」とする。同日付『サンケイ新聞』福井版にも「リンゴの父は松平春岳公 米国から苗木取りよせ 青森の農園から手紙届く」との見出しで同内容の記事が掲載された。ただし、この記事では平野清蔵は小浜藩の家臣だったとされている。
『福井市政週報』433号（1969年7月15日）では「りんごはいつから日本に－松平春嶽の大てがら－」の見出しで次のように報じられた。「日本に「りんご」の苗木がはいってきたのは いまから115年前の安政元年3月3日のことです アメリカのピアス大統領が 日米和親条約を結んだ記念として そのころ將軍徳川家定公に贈ったものと伝えられています」
こうしたエピソードは、前掲『越前松平試農場史』、三上一夫『幕末維新と松平春嶽』吉川弘文館、2004年、『不思議事典』新人物往来社、2000年でも紹介されている。
- 28) 平野は、青森浪岡へのセイヨウリンゴの伝来について、1967年の段階では、「安政元年正月ペルリーは再び来朝し、日米和親条約が結ばれたので、その記念として安政二年米国大統領は十三代將軍徳川家定へリンゴ苗木三本を贈呈しました。家定公はその苗木をそのまま増上寺へ、その功績の印として与えたのが日本のリンゴの初まりです」「一説にはリンゴは北国に適する樹だからと学僧が話したので増上寺では北の国津軽浪岡本陣へ安政二年苗木を下賜したのが動機で、津軽リンゴが土台となって、全国にリンゴが普及されるようになったのではないかとされています」と記している（平野清蔵「リンゴの渡来」『浄土宗新聞』第10号（1967年9月10日）、http://press.jodo.or.jp/newspaper/1967/196709_10_4.pdf（参照2010-01-23））。
- 29) 『明治前期りんご植栽拡大史』青森県りんご発達史第3巻、1962年、p.122。
- 30) 同上、「序」。
- 31) 東北、北海道にわたって自生する野生種ズミの別名で台木として用いられた。
- 32) 同上。
- 33) 「福井藩主并藩士記事」（松平文庫、福井県立図書館保管）。この資料の所在については、吉田健氏に御教示いただいた。
- 34) 鈴木準道（1841-1921）は、1859年（安政6）3月江戸詰出立、同年11月近習番、翌年3月御共二而（福井）帰着、同年12月に小姓となり、藩主茂昭に随って江戸・京都・福井を往復した。維新後は、68年郡奉行、69年福井藩民政局大属、71年福井県権典事等を歴任し76年から松平家家扶として東京邸にあり、89年市制施行時の初代福

- 井市長（「士族」松平文庫、福井県立図書館保管、『福井市史』資料編11、1994年、p.1005）。
- 35) 山田惟正（-1928）は、福井市出身で東京帝国大学農科大学卒業の植物病理学の研究者。京都府農会試農場をへて、松平茂昭次男で旧福井藩松平家当主松平康莊（1867-1930）が旧福井城内に1893年（明治26）に創設した松平試農場に1898年から1925年まで勤務し、25年から27年まで福井県農会農事試験場技師（前掲山田昌雄論文、福井県農会『福井県農会史』、1933年、p.463）。
 - 36) 柘植六郎『実験果樹園芸新書』成美堂、1908年、p.7。
 - 37) 注34) 参照。
 - 38) 岩屋政の履歴は、今のところ確認できないが、1881年（明治14）以降も90年までの慶永の「家譜」に断続的に名が見出せる。
 - 39) 福井藩からも巢鴨邸から板橋宿を警固する人員を指し出した（文久2年11月14日条「家譜」越葵文庫、福井市立郷土歴史博物館寄託）。
 - 40) 「巢鴨町軒別絵図」、旧幕府引継書「和宮御下向」（国立国会図書館）、未見。
 - 41) 高尾善希「近世巢鴨町の機能と景観－「巢鴨町軒別絵図」の分析を中心に」『交通史研究』61、2006年。
 - 42) 豊島区立郷土資料館編『あ・ら・すがも－中山道と巢鴨地域－2007年度企画展図録』豊島区、2007年。
 - 43) 岩淵令治「巢鴨町の社会－その成果によせて－」『巢鴨の賑わいの原点をさぐる－江戸の拡大と巢鴨地域』第三回シリーズフォーラム「東京の地域学を掘り起こす」、2007年。
<http://www.jusoken.or.jp/edotokyo/kiroku-pdf/176kiroku.pdf>（参照2010-01-12）
 - 44) 「江戸邸宅ニ関スル部」松平文庫、福井県立図書館保管。
 - 45) 南本所五ツ目の下屋敷の代地として拝領（「江戸藩邸沿革」東京都編『東京市史稿』市街篇第49、臨川書店、1960年）。
 - 46) 神田橋内添地の代地として拝領（同上）
 - 47) 「家譜」（越葵文庫、福井市立郷土歴史博物館寄託）によれば、神田橋御門内中屋敷が「御用ニ付家作共差上」となった代地として拝領した巢鴨屋敷は「家作無之ニ付」金一万両があわせて下賜された。
 - 48) 磯野直秀によれば、1857年11月25日に巢鴨御薬園が廃止された際、飼育されていた綿羊90匹余は函館奉行に払い下げられたという（典拠は「対外年表」、磯野直秀『日本博物誌年表』平凡社、2002年、p.684）。鈴木準道の回想では、1859年（安政6）に巢鴨屋敷に羊が3・4匹いたとしており、巢鴨御薬園の綿羊の一部が福井藩にも引き継がれたのかもしれない。
 - 49) 上田三平『改訂増補日本薬園史の研究』渡辺書店、1972年、p.214。
 - 50) 1858年（安政5）3月28日条「家譜」越葵文庫、福井市立郷土歴史博物館寄託。
 - 51) 「家譜」越葵文庫、福井市立郷土歴史博物館寄託。前掲「江戸邸宅ニ関スル部」も同様の記述である。
 - 52) 田中正弘「維新変革と旧幕臣の対応－幕臣宮本久平・小一父子の閥歴と越前藩下屋敷の購入顛末」『幕末維新期の社会変革と群像』、2008年、p.207-311。屋敷の譲渡やその後の経緯は「宮本氏記録」「長華園記」などの宮本家の記録に基づいている。この論文は本川幹男氏から御教示いただいた。
 - 53) 同上、p.247-248。
 - 54) 「越前少将内屋敷守徳山由右衛門・木下十之介」から「宮本久平・宮本小一郎」に宛てた巢鴨下屋敷永代御預ケ為取替証文。前掲田中正弘論文、p.277-279。
 - 55) 「家譜」越葵文庫、福井市立郷土歴史博物館寄託。
 - 56) 「新番格以下」松平文庫、福井県立図書館保管。岡倉覚右衛門は、岡倉天心の父。
 - 57) 本川幹男「幕末期、福井藩の他国交易について－横浜・長崎・下関における－」『福井県地域史研究』第12号、2008年。
 - 58) 福井藩側の記録では、1870年7月24日付で浜町・蠣殻町の屋敷を官邸に、常盤橋内の屋敷を私邸とし、それ以外の巢鴨・霊岸島・十間川（本庄）を東京府へ差し出したとされている（前掲「江戸邸宅ニ関スル部」）。
 - 59) 前掲田中正弘論文、p.297-298。
 - 60) 「地木師」は、近郷の山林から庭木に適する自然木を掘り出して仕立て、挿木、取木、その他自家栽培して仕立てた庭木の売買し、その庭木で庭作りを請け負うようなかなり大規模な植木屋であるという（前島康彦『樹芸百五十年』株式会社富士植木、p.51・163）。
 - 61) 平野恵『十九世紀日本の園芸文化－江戸東京、植木屋の周辺』思文閣出版、2006年、p.121・471。
 - 62) 大川所左衛門の名は、1886年（明治19）「東京有名植木師一覧」にも見える（前島康彦『樹芸百五十年』株式会

- 社富士植木、p.168)。
- 63) 加賀藩士小川家文書、石川県立歴史博物館蔵。
 - 64) 長谷川孝徳「大江戸単身赴任事情 役得 リンゴジャムを賞味」『北国新聞』1990年12月26日。また直接「アップル」の記事には触れられていないが、「御参勤御供中日記」に言及したものとして、同「大江戸単身赴任事情」(『加賀殿再訪－東京大学本郷キャンパスの遺跡』東京大学出版会、2000年)がある。
 - 65) 吉田政博「時を紡ぐーいたばしの歴史109 加賀藩江戸下屋敷平尾邸での『アップル』栽培～西洋リンゴはじめて物語」『広報いたばし』2009年(平成21)3月21日。吉田は、「嘉永七年にペリーによって西洋リンゴが日本にもたらされたことを証明する貴重な史料」としているが、この点も可能性はあるが、ペリーがもたらしたことが証明できるものとはいえない。
 - 66) 小川仙之助(のちに清太と改名)は、1850年(嘉永3)亡父の跡目相続、遺知160石拝領、組外御番頭支配となり、同年組入した。53年御近習勤仕、その後63年(文久3)少将様(後の藩主前田利嗣)御抱守、南御土蔵奉行、書物奉行等を務めた。さらに天狗党の敦賀への護送、北越戦争等に関わり、石川県警察に務め、金沢警察署長・河北・羽咋・鹿島の郡長を歴任(『加賀藩史小川家文書目録』石川県立歴史博物館編『加賀藩史小川家文書目録』1990年)。
 - 67) 福井藩でも江戸屋敷については不明であるが、福井城二ノ丸御庭方溜り所に庭掃除や植物を取りあつかう庭方とそれらを使役する「御花壇奉行」が置かれた(鈴木準道・舟沢茂樹校訂『福井藩史事典』歴史図書社、1977年、p.75)。1852年(嘉永5)の慶永の給帳には3人扶持(切米18石)で「花畑絵奉行川村五左衛門」がおり、小頭1人と花作り8人を使っていた(『福井県史』資料編3中・近世一、1982年、p.143)。
 - 68) 「国格類聚」『金沢市史』資料編4、2001年、p.84。
 - 69) これは、前年4月25日に斎藤月岑が医師安田東貞から借用したと記している「アメリカ写真在階子」と同様のものと考えられる(東京大学史料編纂所編『斎藤月岑日記』(五)大日本古記録、岩波書店、2005年、p.184)。
 - 70) 齊泰の指示は、建造中の蒸気船(「雲行丸」)の視察であったが、これは断られている。
 - 71) 11代将軍徳川家斉の娘。
 - 72) 「一歳桃」は浴姫から送られたもので、種を植えたその年に花が咲き、実ができるという(3月11日)。
 - 73) 「夷船雑記」、大蔵省『日本財政経済史料』巻8、1923年、p.5、東京大学史料編纂所近世編年データベース、<http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/shipscontroller>(参照2010.01.19)
 - 74) 前掲磯野直秀「明治前園芸植物渡来年表」、p.46。「遠西舶上画譜(三)」東京国立博物館蔵が出版。
 - 75) 本川幹男「由利公正と幕末藩政改革」『由利公正のすべて』新人物往来社、2001年、同「幕末期、福井藩の殖産興業策について－産物会所の成立を中心に－」『福井県地域史研究』11、2002年、同「幕末期、福井藩の他国交易について－横浜・長崎・下関における－」『福井県地域史研究』12、2008年、『福井市史』通史編2、第7章第5節(本川幹男執筆)、2008年。
 - 76) 吉田健「松平春嶽が日本の『リンゴの父』といわれるのはなぜ」『福井県の不思議事典』新人物往来社、2000年、p.103-104。この手紙の一部は、吉田健「福井藩拳藩上洛計画の探索記について」(『福井県史資料』8、1998年)で翻刻されている。年月日は11月27日の記載しかなく、『福井県の不思議事典』では、1864年(元治1)とされているが、春嶽が上京間もない時期であることを前提とする内容から63年(文久3)の資料と考えられる(「風説書」二、松平文庫、福井県立図書館保管)。
 - 77) 福永郁雄「ヴァン・リード論評」『英学史研究』18、1985年、横浜開港資料館編『横浜もののはじめ考』、1988年。

[付記] 本稿の執筆にあたり、松平文庫(福井県立図書館保管)、石川県立歴史博物館にお世話になった。また近代デジタルライブラリー(国立国会図書館)および東京大学史料編纂所の各種データベースを活用させていただいた。